

父親の育児態度と母親の育児不安

住田, 正樹

九州大学大学院人間環境学研究科教育社会計画学講座 : 教授 : 地域教育社会学

中田, 周作

九州大学大学院人間環境学研究科 : 大学院生 : 地域教育社会学

<https://doi.org/10.15017/963>

出版情報 : 大学院教育学研究紀要. 2, pp.19-38, 2000-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究科発達・社会システム専攻教育学コース

バージョン :

権利関係 :

父親の育児態度と母親の育児不安

住 田 正 樹 ・ 中 田 周 作

《 目 次 》

1. 問題の所在
2. 分析の枠組
3. 調査方法 (以上, 住田)
4. 調査結果の分析
5. 要約と結論 (以上, 中田)

1. 問題の所在

(1)

本稿の目的は、父親の育児態度と母親の育児不安との関連を明らかにすることにある。

これまで育児はもっぱら母親の問題とされてきた。母親には先天的に母性があり、育児能力があるとされてきたのである。しかし、近年になって母親の育児を巡るさまざまな問題が顕在化し、育児困難、育児不安、育児ノイローゼ、果ては虐待などの問題が多々報告されるようになって、漸く母性や母親の育児能力が問題とされるようになってきた。育児は、母親だけの問題ではなく、父親をも含めた、夫婦の問題であると見なされるようになってきたのである。母親だけが育児を担うべきだとする社会的通念が否定されるようになれば、当然のことながら結果として父親の育児参加が期待され、要請されることになる。こうして母性が問題とされ、また母親の育児能力が分析対象として取り上げられるようになってきた。そしてその一方において、近年になって既婚女性労働が増加してきたことから母親だけが育児を担当するのは過重であるとして、父親の育児への参加が社会的にも期待され、要請されるようになってきた。こうして育児は夫婦の問題として扱われるべきだという見方が漸く認識され始めたのである。

育児を夫婦の問題として取り上げる視点は、いろいろあるが、これまでは育児を夫婦関係との関連において捉えようとする視点が重視されてきた。既に、牧野は母親の育児不安が夫婦間のコミュニケーション頻度、父親の育児参加度といった夫婦関係と関連することを見い出している⁽¹⁾。

夫婦関係であれば、当然のことながら、母親も父親もそれぞれ相互の働きかけによって（意図的でないとしても）態度・行為あるいは感情を常に方向づけられ、また常に規定される。育児の問題につ

いても例外ではない。育児に対する母親の態度・行為あるいは感情は父親の態度・行為あるいは感情によって方向づけられ、また規定されるだろう。したがって母親の育児に対する態度・行為を分析するにしても、それは単に母子関係の枠内に留まらず、父親の、母親に対する態度・行為あるいは感情との関連においても、また、父親の育児そのものに対する態度・行為・感情との関連においても分析検討されなければならない。あるいは育児を夫婦の問題として捉えようとするれば、逆に、父親の育児に対する態度・行為・感情、そしてその父親の育児に対する態度・行為・感情を常に方向づけ、規定する母親の育児に対する態度・行為・感情も問題となるだろう。

しかしながら、現在までのところ父親の育児についての研究は未だ多くはない。それは父親の育児参加が期待され、要請されるようになってきているとはいえ、未だその端緒が見え始めたばかりであり、社会的通念にまではなっておらず、実際に父親が育児に参加し、母親と同等の責任をもって育児を分担している場合が多くはないからである⁽²⁾。だが、父親の育児参加が期待・要請されているにもかかわらず、実際には未だ父親の育児参加が多くはないとすれば、その多くはない父親の育児参加の現実と父親の育児参加に期待する母親の要望との間には大きなギャップがあり、その要望がかなえられないが故に母親の失望感、不満感、そして育児の負担感が増し、母親の育児不安は返って高くなるのではないかと考えられる。

(2)

育児不安とは、育児ないし育児行為から喚起される漠然とした恐れ感情である⁽³⁾。だが、その内容は一様ではない。われわれは、先の母親の育児不安に関する研究において、その内容を4つに分類した⁽⁴⁾。すなわち、(A)「育児についての一般的な不安感情」、(B)「子どもの成長・発達に関する不安」、(C)「母親自身の育児能力に対する不安」、(D)「育児負担感・育児束縛感による不安」である。詳細な説明は先の研究に譲るとして、いま簡略に育児不安の内容を述べる。

育児は幼い生命の身体的成長や精神的発達に関わる行為であるから、母親（養育者を母親としておく）は乳幼児の心身のみならず生活全般にわたって注意を払っていなければならない。そのために生じる不安が(A)「育児についての一般的な不安感情」である。また育児は乳幼児の身体的成長や精神的発達を目的とするが、しかしその成長や発達の明確な規準はない。そのために正常に発達しているか否かという不安が常に付きまとう。これが(B)「子どもの成長・発達に関する不安」である。

その乳幼児の身体的成長や精神的発達が正常か否かという不安は、翻って母親自身の育児能力に対する不安を喚起する。これが(C)「母親自身の育児能力に対する不安」である。さらに近年は女性の就業が増加し、また女性の自立が声高に叫ばれ、そしてそれが社会的風潮ともなってきたため、育児に専念することに強い負担感や束縛感を抱いたり、疎外感を抱くようになる。だがそうなれば母親は虚無的になり、育児に対する無力感が生じて育児意欲は低下し、育児に対する悲観的な、無力な感情に陥って育児不安が喚起するようになる。これが(D)「育児負担感・育児束縛感による不安」である。こうした育児不安は父親の場合も同じである。但し現時点では、父親の場合、(D)「育児負担感・育児束縛感による不安」はない⁽⁵⁾。

ところで先に述べたように、現在は、父親の育児参加が期待され、要請されるようになってきているにもかかわらず、実際には未だ父親の育児参加は多くはないのが一般的である。したがって父親の育児参加に対する母親の期待、要望が強いほど、父親の育児参加の現実に失望し、また不満を抱き、そのために育児の責任や育児の過重からくる負担感だけが強まり、かえって母親の育児不安が高まっていくのではないかと思われる。しかし事実は果たしてどうか。

本稿は、夫婦関係の在り方を父親の育児参加の視点から捉え、その夫婦関係の在り方が母親の育児不安にどのように影響しているかを明らかにすることを課題としている。つまり夫婦関係の在り方を父親自身の育児参加に対する態度とその父親の育児参加の態度に対する母親の評価との関連から把握し、そうした夫婦関係のあり方と母親の育児不安との関連を探ろうとしたのである。

2. 分析の枠組

母親の育児不安と夫婦関係との関連を明らかにするために、これまでは、夫婦間のコミュニケーション頻度、父親の育児参加に対する母親の満足度を指標として夫婦関係の在り方を捉えてきた。その結果、「父親とのコミュニケーションの頻度が高いほど母親の育児不安は低く、また父親の育児への参加度が高いほど、母親の満足度は高く、育児不安は低い」という関係が見い出された。

しかしここでは、父親の育児参加に対する現実の姿と父親の育児参加に対する母親の期待あるいは要望との関連から夫婦関係を捉え、そうした夫婦関係の在り方と母親の育児不安との関連を明らかにすることが課題であるから、具体的な指標として父親の育児参加態度に対する父親自身の評価とその父親の育児参加態度に対する母親の評価を考えた。父親の育児参加の態度を父親自身はどのように評価しているのか、そしてその父親の育児参加の態度を母親はどのように評価しているのかということである。父親は自身の育児参加度を高く評価しているのか、それとも自身の育児参加度を低く評価しているのか。またそうした父親の育児参加を母親は高く評価しているのか、それとも低く評価しているのか。

したがって、父親の育児参加態度に対する父親自身の評価の高低と母親の評価の高低との軸を組み合わせることによって、夫婦関係の在り方は4つのタイプに類型化されることになる。この4つのタイプを、便宜的に、Ⅰ型、Ⅱ型、Ⅲ型、Ⅳ型と呼んでおこう。いま、それぞれのタイプを仮説的に提示すると以下ようになる。

Ⅰ型 = 父親自身が自分の育児参加態度を高く評価し、かつ母親も父親の育児参加態度を高く評価している関係のタイプ。したがって父親は積極的に育児に参加し、母親もそれを認めている。先に見た如く、父親の育児への参加度が高いほど母親の満足度は高く、育児不安は低いとすれば、このタイプの関係の母親は育児不安が低いだらうと推定される。

Ⅱ型 = 父親自身は自分の育児参加態度をそれほど高く評価していないが、母親は父親の育児参加態度を高く評価しているタイプ。母親が高く評価しているにもかかわらず、父親は自身の育児態度に低い評価しか与えていないのであるから、父親自身は育児参加の可能性を現に参加している程度以

上の水準にしているために現実の参加水準と自己期待水準との間に齟齬が生じ、その齟齬の故に、たとえ母親が高く評価しているとしても、自身の育児態度を肯定的に評価することができないのだろう。しかし、にもかかわらず母親の評価が高いのは、父親の育児参加に対する母親の期待水準が父親の自己期待水準よりも低い水準にあるからかも知れないし、あるいは母親の評価の対象が父親の現実の参加態度ではなく、父親の、いわば意識としての自己期待水準にあるのかも知れない。しかしいずれにしろ父親の育児参加態度に対する母親の評価は高いのであるから母親の育児不安は低いと推定される。

Ⅲ型 = 父親自身は自分の育児参加を高く評価しているにもかかわらず、母親は父親の育児参加を高くは評価していない関係のタイプ。父親自身の評価は高いのに母親の評価は高くないのであるから、実際には父親の育児参加は母親にとってはあまり役に立ってはおらず、つまるところ父親の育児参加は父親の自己満足に終わっているのではないかと思われる。それだけに父親の育児参加は母親の期待に比べてはおらず、したがって母親の満足度は低く、育児不安は高いだろうと推定される。

Ⅳ型 = 育児参加態度に対する父親自身の評価は低く、かつ母親も父親の育児参加態度を低くしか評価していない関係のタイプ。したがって父親は育児を全て母親に任せている。それ故、母親の満足度は低く、育児不安は高いだろうと推定される。

3. 調査方法

調査の目的は、父親の育児態度と母親の育児不安との関連を解明することであるから、調査対象は、保育園児および幼稚園児の父親と母親とした。福岡市の都市地域および近郊地域からそれぞれ1つの保育園と2つの幼稚園をサンプリングして選定し、留置調査を実施した。質問紙の配布と回収は、保育園・幼稚園の協力を得て園児を通して行った。

質問紙は、母親を対象とした質問紙と父親を対象とした質問紙の2つを作成した。1つの封筒に父親対象の質問紙と母親対象の質問紙を同封し、父親と母親がペアになるように配布・回収した。いずれも匿名である。しかし近郊地域の1つの幼稚園については園への説明が不十分だったためか、回収した調査票を父親と母親に分類してしまったために、母親と父親をペアで回収することはできなかった。この幼稚園の園児の母親と父親の質問紙は除外している。

調査時期は、1996（平成8年）2月～5月であり、有効回収票は570組票、回収率は93.4%であった。但し1人親も含んでいる。

4. 調査結果の分析

(1)

さて、調査データに立ち入って分析するわけであるが、その際の分析の枠組となる夫婦関係のタイプ化の手続きについて述べておく。

父親の育児態度と母親の育児不安

この夫婦関係のタイプ化に用いた質問は、父親を調査対象とした「父親の育児参加に対する自己評価」の質問項目と母親を対象とした「父親の育児参加に対する母親の評価」の質問項目の2問である。すなわち、

《父親対象の調査票》

[問2] あなたは、次のようなことをどのくらいしますか。

- ① 子どもを風呂に入れる
- ② 子どものおむつの交換をする
- ③ 子どもの遊び相手をする
- ④ 子どもの着替えをする
- ⑤ 子どもの生活習慣のしつけをする

《母親対象の調査票》

[問5] あなたのご主人は、次のようなことをどのくらいしていますか。

- ① 子どもを風呂に入れる
- ② 子どものおむつの交換をする
- ③ 子どもの遊び相手をする
- ④ 子どもの着替えをする
- ⑤ 子どもの生活習慣のしつけをする

この質問の回答は、それぞれ「よくしている」、「ときどきしている」、「あまりしていない」の3段階であり、結果は表1、表2に示してある。そしてこの3段階の回答にそれぞれ3,2,1の評点を与え、それぞれの平均点を算出して、その平均点を軸に父親自身の評価と母親の評価とを交差させることによって、先の4タイプを析出したのである。父親自身の評価の平均点は2.09点、母親の評価の平均点は1.91点であった。4タイプそれぞれの度数と比率は、表3のようである。夫婦間の評価が高いにしろ低いにしろ一致している場合（Ⅰ型、Ⅳ型）よりも、父親自身の評価よりも母親の評価の方が高いか（Ⅲ型）あるいは母親の評価よりも父親自身の評価の方が高いか（Ⅱ型）という夫婦間の評価が不

表1 父親の育児参加に対する父親の自己評価

(%)

あなたは、次のようなことを、どのくらいしますか。 あてはまるところに○をつけてください。		よく している	ときどき している	あまり していない
①	子どもを風呂に入れる。	36.3	44.7	11.8
②	子どものおむつの交換。	6.0	37.9	40.0
③	子どもの遊び相手。	24.6	57.2	11.6
④	子どもの着替え。	7.2	43.2	40.5
⑤	子どもの生活習慣のしつけ	16.7	50.5	25.6

(注) 無回答・不明を除く。以下同様。

表2 父親の育児参加に対する母親の評価

(%)

それでは、あなたのご主人は、次のようなことを、どのくらいよくしていますか。当てはまるところに○をつけてください。		よく している	ときどき している	あまり していない
①	子どもを風呂に入れる。	29.8	54.6	11.4
②	子どものおむつの交換。	4.0	33.0	45.1
③	子どもの遊び相手。	32.6	53.7	9.6
④	子どもの着替え。	5.4	35.8	52.5
⑤	子どもの生活習慣のしつけ	20.9	54.2	20.9

表3 各タイプの実数と割合

(%)

		父親の育児参加に対する母親の評価				計
		高		低		
父親の育児参加に対する父親の 自己評価	高	I型	50 (11.7)	Ⅲ型	156 (36.6)	206 (48.4)
	低	Ⅱ型	161 (37.9)	Ⅳ型	59 (13.8)	220 (51.6)
計			211 (49.5)		215 (50.5)	426 (100.0)

(注) 括弧内は%

一致の場合の方が多い。

(以上、住田正樹)

(2)

まずそれぞれのタイプに分類した父親と母親の年齢と職業について見ておこう。表4に見るように、どのタイプも父親は35-39歳、母親は30-34歳に集中しており、タイプ別による差異はない。ただ父親自身の評価よりも母親の評価の方が高いⅢ型において父親も母親もともに35-39歳が多くなっており、夫婦の年齢が近似的であるほど父親の育児態度に対する母親の評価が厳しいことを示している。

表5は就業形態を見たものである。「フルタイム勤務」の父親が8割、専業主婦がおおよそ半数といたところであるが、Ⅳ型に自営業の父親が多く、パートタイムの母親が多い傾向が見られる。つ

表4 年 齢

(%)

	型	父親					型	母親			
		30歳未満	30-34歳	35-39歳	40歳以上			30歳未満	30-34歳	35-39歳	40歳以上
父親	I	9.8	19.6	45.1	25.5	母親	I	17.6	41.2	27.5	13.7
	Ⅱ	7.5	28.8	36.8	26.9		Ⅱ	14.9	44.1	27.3	13.7
	Ⅲ	4.6	26.1	38.6	30.7		Ⅲ	15.6	27.9	46.8	9.7
	Ⅳ	6.8	20.3	42.4	30.5		Ⅳ	13.6	38.9	35.6	11.9

父親の育児態度と母親の育児不安

表5 就業形態

(%)

	型	フルタイム勤務	自営業		型	30歳未満	30-34歳	パートタイム	内職	専業主婦
父親	I	80.4	15.7	母親	I	11.8	9.8	17.6	7.6	51.0
	II	49.2	19.5		II	15.0	11.3	20.0	3.1	49.4
	III	78.4	19.0		III	11.8	5.9	17.6	8.5	54.2
	IV	74.6	25.4		IV	6.8	13.6	35.6	1.7	42.3

(注)「その他」は省略

まり自営業の父親は自身の評価が低く、またパートタイムの母親の父親評価は低いといえようか。

(3)

表6～表10は、さまざまな育児行為のなかから「子どもを風呂に入れる」、「子どものおむつの交換をする」、「子どもの遊び相手をする」、「子どもの着替えをする」、「子どもの生活習慣のしつけをする」

表6 子どもを風呂に入れる

(%)

	型	している	していない		型	していると思う	していないと思う
父親	I	88.2	11.5	母親	I	100.0	0.0
	II	100.0	0.0		II	98.8	1.2
	III	72.1	27.9		III	76.6	23.4
	IV	98.3	1.7		IV	84.7	15.3

(注) 父親は自己評価。母親は対父親評価。表13まで同様。

表7 子どものおむつの交換

(%)

	型	している	していない		型	していると思う	していないと思う
父親	I	39.2	60.8	母親	I	76.5	23.5
	II	81.1	18.9		II	75.0	25.0
	III	20.8	79.2		III	15.7	84.3
	IV	72.9	27.1		IV	25.4	74.6

表8 子どもの遊び相手

(%)

	型	している	していない		型	していると思う	していないと思う
父親	I	88.2	11.8	母親	I	100.0	0.0
	II	98.8	1.2		II	98.1	1.9
	III	72.7	27.3		III	77.3	22.7
	IV	100.0	0.0		IV	91.5	8.5

表9 子どもの着替え

(%)

	型	している	していない		型	していると思う	していないと思う
父親	I	37.3	62.7	母親	I	78.4	21.6
	II	87.5	12.5		II	78.9	21.1
	III	18.8	81.2		III	13.6	86.4
	IV	81.4	18.6		IV	25.4	74.6

表10 子どもの生活習慣のしつけ

(%)

	型	している	していない		型	していると思う	していないと思う
父親	I	49.1	50.9	母親	I	96.1	3.9
	II	93.8	6.2		II	95.7	4.3
	III	46.1	53.9		III	61.7	38.3
	IV	96.6	3.4		IV	61.0	39.0

といった父親が行いそうな育児行為を取り上げて、それぞれ父親の自己評価と母親の評価を尋ねたものである。回答は、いずれも「よくしている」、「ときどきしている」、「あまりしていない」、「全然していない」の4段階に区分「している」とする比率が「していない」とする比率よりも相当に高い比率を示しているしたが、表には前二者を「している」、後二者を「していない」の2段階にして示した。いずれの育児行為についても父親自身が「している」と高く自己評価しているタイプは、II型とIV型であり、母親が高く評価しているタイプはI型とII型である。

父親の育児態度に対する母親の評価がI型とII型において高いのは、元々これら2つのタイプの母親が父親の育児態度を高く評価しているという関係のタイプであるから当然の結果なのであるが、しかし父親の場合は、仮説的なタイプの内容とは異なって、父親の自己評価の高いはずのI型とIII型のタイプにおいて「している」とする高い評価は少なく、父親の自己評価の低いはずのII型とIV型のタイプにおいて「している」とする高い評価は多くなっている。取り分け表7の「子どものおむつの交換をする」と表9の「子どもの着替えをする」という育児行為については顕著な傾向が見られ、父親の自己評価の低いはずのII型とIV型のタイプにおいては「している」とする比率が「していない」とする比率よりも相当に高い比率を示しているのに対し、父親の自己評価の高いはずのI型とIII型のタイプにおいては、これとは全く逆に、「していない」とする比率の方が「している」とする比率よりも相当に高くなっている。明らかに自己の育児態度を高く評価しているI型とIII型のタイプにおいて、父親は「子どものおむつの交換」も「子どもの着替え」もしていないのである。そして全く逆に、自己の育児態度を低くしか評価していないII型とIV型のタイプの父親が実は「子どものおむつの交換」も「子どもの着替え」も「よくしている」わけである。

同じ育児行為であっても、「子どもを風呂に入れる」と「子どもの遊び相手をする」というのは、い

父親の育児態度と母親の育児不安

表11 子どもと一緒にいる時間

(%)

	型	多い	少ない		型	多い	少ない
父親	I	34.0	66.0	母親	I	78.4	21.6
	II	59.3	40.7		II	76.4	23.6
	III	16.8	83.2		III	79.2	20.8
	IV	49.2	50.8		IV	78.0	22.0

(注)「多い」＝「多い方だと思う」＋「どちらかといえば多い」。
「少ない」＝「どちらかといえば少ない」＋「少ない方だと思う」。

わば父親自身の都合に合わせることでできる行為である。在宅時間に合わせて、あるいはそのなかで都合のよいときに父親は子どもの世話をすればよい。だから父親のタイプ別による若干の差異はあれ、どのタイプの父親も「している」のである。しかし「子どものおむつの交換をする」と「子どもの着替えをする」という育児行為は、父親はむしろ子どもの側に合わせなければならない。自分の都合に合わせてできる育児行為ではない。つまり子どもの生活時間と父親の在宅時間にズレがあれば、父親はこうした育児行為をすることができない。だからI型とIII型の父親は子どもと接触する時間が少ないのではないと思われる。実際、表11の「子どもと一緒にいる時間」を見ると、II型とIV型は接触している時間が「多い」としている方が50%～60%と多いが、I型とIII型は、逆に接触時間は「少ない」とする方が遙かに多く、おおよそ70%～80%を占めている。

「子どもの生活習慣のしつけをする」という育児行為は他の4つの育児行為とは異なり、子どもとの常時の接触を必要とする。常時の子どもの態度・行動に配慮していなければならないから父親の時間の都合に合わせてできるような育児行為ではない。したがって、II型、IV型とI型、III型の間の差異はさらに大きくなるのではないか。実際、表10に見るように、II型とIV型は「生活習慣のしつけをしている」とする父親が94%～97%もの高い比率を示しているのに対し、I型とIII型の父親は46%～49%が「生活習慣のしつけをしている」に過ぎず、51%～54%と過半数の父親が「生活習慣のしつけをしていない」としている。

(4)

表12は「育児を主に誰がしているか」について見たものである。母親の場合はI型、II型とIII型、IV型の間で傾向が異なる。III型、IV型の殆どが「主に母親」としているのに対し、I型、II型は「夫婦で分担」が2割程度を占める。これに対して父親の場合は、先の傾向と同様に、I型、III型とII型、IV型との間で傾向が異なり、I型、III型の殆どが「主に母親」としているが、II型、IV型は2割弱が「夫婦で分担」としている。つまり母親の育児分担意識は、父親の育児態度に対する評価によって異なり、父親の育児態度を高く評価している母親は父親と「分担」しているとしているが、父親の育児態度を低くしか評価していない母親は自身を育児の責任者としているのである。父親の育児態度を高く評価している場合は、高く評価しうるほどの育児行為を父親がしているから育児を分担しても安心

表12 育児の担当

(%)

	型	主に母親	夫婦で分担	その他		型	主に母親	夫婦で分担	その他
父親	I	94.1	3.9	2.0	母親	I	84.3	15.7	0.0
	II	75.7	19.4	4.9		II	72.7	23.6	3.7
	III	97.5	0.6	1.9		III	98.1	0.6	1.3
	IV	86.4	11.9	1.7		IV	94.9	1.7	3.4

(注)「その他」＝「父親」＋「祖父母」＋「その他」

表13 育児に関する夫婦間のコミュニケーション頻度

(%)

	型	多い	少ない		型	多い	少ない
父親	I	28.0	72.0	母親	I	74.5	25.5
	II	59.4	40.6		II	75.7	24.3
	III	18.2	81.8		III	42.2	57.8
	IV	37.9	62.1		IV	42.4	57.6

(注)「高」＝「よく話をする」。「低」＝「ときどき」＋「あまりない」＋「ぜんぜんない」。

だが、父親の育児態度を低くしか評価し得ない程度の育児行為ならば育児を父親に任せてはおけないということなのだろう。

この育児分担意識では、Ⅱ型とⅢ型の父親と母親が一致している。Ⅱ型は父親も母親も「分担」としており、Ⅲ型は「母親」としている。しかしⅠ型とⅣ型では父親と母親との間に意識の違いがあり、Ⅰ型では父親は「母親」とし、母親は「分担」としている。Ⅳ型は、逆に父親は「分担」、母親は「母親」としている。Ⅱ型、Ⅲ型は夫婦間で一致しており、またⅣ型は不一致ではあるものの、父親自身は自身の育児態度を高く評価していないから「母親」に育児を任せていると考え、母親もそうした父親の育児態度を評価せずに父親に育児を任せられないとして自身を育児の責任者としている。しかしⅠ型は夫婦間で齟齬が見られる。父親は自身の育児態度を高く評価しているにも拘わらず育児の責任者は「母親」とし、そうした父親の育児態度を高く評価している母親は、それ故に育児は「分担」としてしているのである。これは俗に言えば責任のなすりあいに近いパターンである。したがって先に述べたⅠ型の内容、すなわち父親は積極的に育児に参加しているために母親の満足度は高く、したがって母親の育児不安は低いという傾向は必ずしも妥当するものではないと思われる。父親が育児に積極的に参加しているために母親は「分担」としているが、父親の方は「分担」している意識はないのであるから、したがって夫婦間相互のコミュニケーションは必ずしも高いとはいえないのではないと思われる。

表13は父親と母親の「育児に関する夫婦間のコミュニケーション頻度」について見たものである。回答項目はそれぞれ「よく話をする」、「ときどき話をする」、「あまり話をしない」、「全然話をしない」

の4段階としたが、表には「よく話をする」を「コミュニケーション頻度の高い」群、後三者を「コミュニケーション頻度の低い」群として結果を示している。先の育児分担と同様に母親は、Ⅰ型、Ⅱ型とⅢ型、Ⅳ型の間で傾向が異なる。Ⅰ型、Ⅱ型はおおよそ8割近くが「夫婦間のコミュニケーション頻度は高い」としているのに対してⅢ型、Ⅳ型は6割が「コミュニケーション頻度は低い」としている。これに対して父親の場合は、これまでと同様に、Ⅰ型、Ⅲ型とⅡ型、Ⅳ型との間で傾向が異なり、Ⅱ型は6割が「コミュニケーション頻度は高い」とし、またⅣ型は4割が「コミュニケーション頻度は高い」として類似的な傾向を示しているのに対して、Ⅰ型、Ⅲ型は8割が「コミュニケーション頻度は低い」としている。つまり母親の「育児についての夫婦間のコミュニケーション頻度」に対する評価は、育児分担意識と同じく、父親の育児態度に対する評価によって異なり、父親の育児態度を高く評価している母親は「夫婦間のコミュニケーション頻度は高い」と見なしているが、父親の育児態度を低く評価している母親は「夫婦間のコミュニケーション頻度は低い」と見なしているのである。そして父親は自身の育児態度を高く評価している場合（Ⅰ型、Ⅲ型）には「夫婦間のコミュニケーション頻度は低い」としているが、自身の育児態度を低く評価している場合（Ⅱ型、Ⅳ型）は「夫婦間のコミュニケーション頻度は高い」としている。

この「育児についての夫婦間のコミュニケーション頻度」についても、育児分担意識と同様に、Ⅱ型とⅢ型の父親と母親の評価は一致している。Ⅱ型は父親も母親も「夫婦間のコミュニケーション頻度は高い」としているが、Ⅲ型はいずれも「コミュニケーション頻度は低い」としている。しかしながらⅠ型とⅣ型では「コミュニケーション頻度」に対する父親と母親の評価にはズレがあり、Ⅰ型では父親は「コミュニケーション頻度は低い」としているが、母親は「高い」としているし、Ⅳ型では、逆に父親は「高い」としているが、母親は「低い」としている。

Ⅱ型とⅣ型の父親・母親は「育児は分担」が他のタイプよりも多いが、大半は育児は「主に母親」である。しかしいずれにしても、この2つのタイプは安定している。何故なら、「分担」にしる「母親」にしる、Ⅱ型は父親も母親も「コミュニケーション頻度は高い」のであるから、夫婦間で話し合いながら育児を行っているだろうし、Ⅲ型は「育児は母親」なのであるから父親も母親もともに夫婦間の「コミュニケーション頻度が低い」としていても、母親が主として育児を担っている限り問題はない。そしてⅣ型も「育児についての夫婦間のコミュニケーション頻度」が父親において高く母親において低いという不一致をなしていても、「育児は母親」という点では一致しているのであるから母親が主として育児を担っている限りでは問題はないだろう。しかしⅠ型は、育児の分担についても「夫婦間のコミュニケーション頻度」についても父親と母親との間で齟齬が見られる。父親は積極的に育児に参加していると自己評価しているにも拘わらず育児は「母親」であるとし、また「コミュニケーション頻度も低い」と評価しているが、母親は、そうした父親の積極的な育児参加態度を高く評価して「育児は分担」しており、「夫婦間のコミュニケーション頻度も高い」と見なしている。言い換えれば、Ⅰ型の母親の「育児は分担している」という意識も「夫婦間のコミュニケーション頻度は高い」という意識も、母親がそう思っているだけであって夫婦間で話し合われて決められたものではないのである。父親は「育児は母親」だと思っているし、したがってそのことについての「夫婦間のコミュニケー

ション」の必要性も認めていない。だから「育児についての夫婦間のコミュニケーション頻度は低い」、つまり必要はないと思っているのではないか。にも拘わらず「夫婦間のコミュニケーション頻度は高い」と母親が判断しているのは、実は母親からの一方的なコミュニケーションなのではないのか。とすれば、育児の責任について父親と母親との間で互いに相手に責任を押しつけているという、先の言葉で言えば、責任のなすりあいに近いパターンとなる。それが未だ顕在化していないだけではないのか。したがって先に仮説的に述べたタイプの性格、すなわち父親は積極的に育児に参加しているから母親の満足度は高く、母親の育児不安は低いという傾向には疑問無しとしない。

(5)

先に述べたように、育児は夫婦の問題として扱われるべきだという見方が最近になって漸く認識され始めたが、それでは母親は育児に如何に取り組むべきだと考えているのだろうか。表14は母親像について尋ねたものである。「育児は大切だから母親は子どもを育てることに専念すべきだ」という母親像と「育児も大切だが、母親も自分自身の生活を持つべきだ」という母親像のいずれを支持するかという質問である。表に見るように、いずれのタイプの母親も8～9割が「育児も大切だが、母親も自分自身の生活を持つべき」という意見を支持している。タイプ別による差異はない。しかし父親は、全体的に見れば8割前後が「母親も自分自身の生活を持つべき」としているが、タイプ別に見れば若干の差異が見られる。やはりI型、Ⅲ型とⅡ型、Ⅳ型との間で傾向が異なるようである。I型とⅢ型の父親は、Ⅱ型とⅣ型の父親よりも「母親は子どもを育てることに専念すべきだ」という意見が幾分多く見られる。こうした傾向の差は、育児の担い手(表12)と符合する。I型とⅢ型の父親は「母親は育児に専念すべきだ」だとするから育児の担い手も「母親」(表14)がすべきなのである。しかしⅡ型とⅣ型の父親は「母親も自分自身の生活を持つべき」だとするから育児も父親と母親との「分担」なのである。言い換えれば、自分の育児態度を高く自己評価している父親(I型、Ⅲ型)は「育児は母親が担うべき」だとし、自分の育児態度を低く自己評価している父親(Ⅱ型、Ⅳ型)は「母親も自分自身の生活をもつべき」だとしているわけである。

しかし、そうとすれば、I型とⅢ型の父親が自分の育児態度を高く自己評価するのは、母親が担うべき育児を自分が補助し援助しているのだという、いわば優越感にも似た感情から結果していること

表14 望ましい母親像

(%)

	型	育児は大切だから、母親は子どもを育てることに専念すべきだ	育児も必要だ。しかし母親も自分自身の生活を持つべきだ		型	育児は大切だから、母親は子どもを育てることに専念すべきだ	育児も必要だ。しかし母親も自分自身の生活を持つべきだ
父親	I	25.0	75.0	母親	I	16.0	84.0
	Ⅱ	18.9	81.8		Ⅱ	15.0	85.0
	Ⅲ	22.7	77.3		Ⅲ	10.1	89.9
	Ⅳ	14.3	85.7		Ⅳ	17.0	82.5

ではないのか。だからⅠ型とⅢ型の父親にとっては「育児についての夫婦間のコミュニケーションが低く」(表13)でも当然なのである。Ⅰ型とⅢ型の父親にとっては育児は母親が担うべきものなのだから、今更「育児について夫婦間で話し合う」必要を感じないのである。だが、「母親も自分自身の生活をもつべき」だとするⅡ型、Ⅳ型の父親は、それだからこそ「育児は分担」しなければならないから、育児について母親と頻繁にコミュニケーションを取らなければならないのである。

(6)

さて、次に育児不安との関連を見よう。先に育児不安の内容を4つのカテゴリーに分類したが、この、それぞれのカテゴリーについて4～5の質問項目を作成し、父親・母親それぞれについて調査した結果をタイプ別に集計したのが表15である。それぞれの回答項目は「よくある」、「ときどきある」、「あまりない」の3段階としたが、表には「よくある」、「ときどきある」を合わせて「ある」とした結果を示した。そしてこの結果を育児不安のカテゴリー別に見るために、育児不安項目の(A)カテゴリーでは4項目上の質問項目を選択、育児不安(B)・(C)・(D)のカテゴリーではそれぞれ3項目以上の質問項目を選択した場合を、それぞれのカテゴリーの育児不安が「ある」と見なし、それを母親について再集計したのが表16である。したがって全てのカテゴリーの育児不安項目については((A+B+C+D)の欄)、13項目以上を選択した母親の比率を示している。

表に見るように、母親の育児不安については明らかにⅠ型と他のタイプのⅡ型、Ⅲ型、Ⅳ型との間に差異があることが分かる。Ⅱ型、Ⅲ型、Ⅳ型では、育児不安の、どの項目についてもおおよそ30%～40%の母親が「ある」としているに過ぎないが、Ⅰ型では過半数の60%前後が「ある」としている。それぞれのカテゴリーの育児不安の合計も同じ結果を示している(表中の(A+B+C+D)の欄を参照)。

このⅠ型の母親の育児不安は、先に述べたように、Ⅰ型の関係の父親・母親は、ともに父親の育児態度を積極的に評価しながらも、相互のコミュニケーション頻度は低く、育児の責任についても互いに回避的であるという齟齬から生じているのではないか。

そして表16の右欄には、育児に対する母親の肯定的感情の比率を示した。回答項目はそれぞれ「よくある」、「ときどきある」、「あまりない」の3段階であるが、表には「よくある」、「ときどきある」を合わせて「ある」とした結果を示している。タイプ別による差異は顕著ではないが、全体としてみれば、Ⅰ型とⅡ型の母親に肯定的感情が高いようである。とすれば、Ⅰ型の母親は、われわれが先の「母親の育児不安に関する調査研究」において設定した「過剰型」に当たる⁽⁵⁾。過剰型は育児の肯定的感情も高いが育児不安も高いタイプの母親であり、夫婦間のコミュニケーションに齟齬があると特徴づけられたタイプである。つまり育児の肯定的感情が高く、一見安定しているようではあるが、育児不安も高いために、育児不安の状況に陥る可能性の高いタイプである。

最後に、父親の育児態度に対する母親の満足度を見ておこう。表17は、母親に対しては、父親の育児態度に対する満足度を尋ねたものであるが、父親に対しては、自身の育児態度を母親がどのように評価していると思うか、つまり満足していると思うか、それとも満足していないと思うかを推測させ

表15 母親と父親の育児不安・肯定的感情

(%)

育児不安のタイプ				I	II	III	IV
(A) 育児不安感情についての一般的な	1	子どもが、わずらわしくてイライラすることがある	父親 母親	58.8 86.0	50.9 62.4	51.3 67.4	43.1 60.7
	2	子どものことを考えるのが面倒になることがある	父親 母親	23.5 30.2	22.4 18.8	24.7 24.1	15.3 21.4
	3	子どもが自分の言うことを聞かないのでイライラすることがある	父親 母親	66.7 95.3	72.0 94.6	63.0 88.7	59.3 96.4
	4	子どもが汚したり、散らかしたりするので嫌になることがある	父親 母親	45.1 69.8	60.6 65.8	45.5 74.5	49.2 75.0
	5	自分の子どもでも、かわいくないと感じることもある	父親 母親	19.6 25.6	14.9 22.1	16.9 22.7	6.8 25.0
(B) 子どもに関する成長不安・発	6	自分が思っているように子どもが成長しないので成長が遅れているのではないかと思うことがある	父親 母親	29.4 24.4	14.3 11.8	13.6 10.7	20.3 10.0
	7	子どもが病気にかかったり事故にあわないかと心配することがある	父親 母親	88.2 100.0	84.5 98.5	77.3 94.3	93.2 98.0
	8	他の子どもと比べて、自分の子どもの発達が遅れているのではないかと思うことがある	父親 母親	29.4 22.2	16.9 12.5	14.9 12.3	15.3 20.0
	9	育児雑誌や育児書と比べて、自分の子どもの発達が遅れているのではないかと思うことがあるが	父親 母親	12.0 15.6	13.1 9.6	7.8 7.4	8.5 12.0
(C) 母力に親自身に対する育児不安	10	育児のことでどうしたらよいか分からないことがある	父親 母親	39.2 70.5	38.5 54.3	36.4 58.8	39.0 60.4
	11	他のお母さんの育て方と比べて、自分の育て方でよいのかどうか不安になることがある	父親 母親	31.4 61.4	26.7 44.1	27.3 60.3	28.8 54.7
	12	テレビや雑誌・本を見て、自分の育て方でよいのかどうか不安になることがある	父親 母親	19.6 38.6	17.4 24.4	22.1 32.8	15.3 43.4
	13	子どもを、よく育てなければならぬという気持ちを感じることもある	父親 母親	66.7 77.3	72.0 90.6	70.1 83.2	76.3 83.0
(D) 育児束縛感による不安	14	子どもに時間を取られて、自分のやりたいことができず、イライラすることがある	父親 母親	— 80.0	— 70.5	— 72.6	— 69.0
	15	友人や知人が充実した生活をしているようなので焦りを感じることもある	父親 母親	— 47.5	— 33.9	— 46.2	— 38.1
	16	テレビや雑誌などで見る女性の姿と自分を比べて遅れていると感じることがある	父親 母親	— 52.5	— 47.3	— 38.5	— 61.9
	17	毎日、育児の繰り返しばかりで、社会との絆が切れてしまうように感じることもある	父親 母親	— 42.5	— 45.5	— 47.9	— 40.5
育児に対する肯定的感情				I	II	III	IV
(E) 育児に対する肯定的感情	18	子どもを育てるのは、楽しいと感じることがある	父親 母親	86.3 96.1	95.6 96.9	89.6 91.4	89.8 96.6
	19	子どもを育てることによって、自分も成長しているのだと感じることがある	父親 母親	76.5 92.2	85.6 94.4	79.2 92.8	78.0 91.4
	20	子どもを育てるのは有意義ですばらしいことだと思うことがある	父親 母親	84.3 86.3	88.1 87.6	84.4 84.9	87.9 91.4
	21	病気もしないで、子どもは元気に育っていると感じることがある	父親 母親	90.2 92.2	92.5 93.2	92.2 90.8	87.7 93.1
	22	自分の子どもは、思うようにうまく育っていると感じることがある	父親 母親	84.3 82.4	89.4 90.7	86.8 71.1	87.9 79.3

父親の育児態度と母親の育児不安

表16 母親の育児不安と育児の肯定的感情

(%)

	型	育 児 不 安					育児の 肯定的感情 (E)
		不安 (A)	不安 (B)	不安 (C)	不安 (D)	不安全体	
母親の 育児不安	I	64.0	53.1	54.0	58.0	59.2	60.0
	II	49.0	37.3	34.4	41.3	37.7	66.3
	III	51.9	34.4	39.6	45.8	42.5	55.7
	IV	55.9	35.6	43.9	43.1	42.1	58.6

表17 育児に対する満足度

(%)

	型	母親は満足して いると思う	母親は満足して いないと思う		型	満足している	満足していない
II	75.8	24.2	II	85.7	14.3		
III	38.2	61.8	III	37.0	63.0		
IV	59.3	40.7	IV	42.4	57.6		

たものである。回答項目はそれぞれ「非常に満足している」、「まあ満足している」、「あまり満足していない」、「全然満足していない」の4段階としたが、表には前二者を「満足」、後二者を「不満足」とカテゴリー化して示した。

この表17には、これまでの各タイプの特徴的な傾向がそのままに示されている。母親についてはI型、II型とIII型、IV型の間で、父親についてはI型、III型とII型、IV型との間で、それぞれ傾向を明瞭に異にしている。I型、II型の母親は8割が父親の育児態度に満足しているのに対してIII型、IV型の母親で満足しているのは4割程度に過ぎず、6割が満足していないとしている。また父親については、II型、IV型の父親では6～7割以上が母親は自分の育児態度に満足しているだろうと思っているのに対してI型、III型では逆に6割が母親は自分の育児態度に満足していないだろう、不満足だろうと思っている。

したがって父親の育児態度を高く評価している母親は育児に対する満足度が高いが、父親の育児態度を低く評価している母親は育児に満足していない。一方、父親について見ると、自身の育児態度を高く評価している父親は母親は自分の育児態度に満足していないだろうと思い、逆に自身の育児態度を低く評価している父親は母親は自分の育児態度に満足しているだろうと思っている。このことは自身の育児態度を高く評価している父親は、つまるところ自身の育児参加が母親との話し合いをもつことなく、つまり母親の期待・要請に応じる形で行ってはいない、いわゆる自己満足的な参加行動であること認識しているからではないか。表12によれば自身の育児態度を高く評価しているI型、III型の父親は育児の担当は母親だとしているにも拘わらず、表13によれば育児について母親とコミュニケー

ションをもつことは少ないのであるから、その育児参加は、いわば自分の都合に合わせての育児参加ではないと思われる。それがⅠ型とⅢ型に分かれるのは、表6～10に見るように、Ⅰ型の父親が、母親の期待・要請に応じる形で行ってはいない育児参加であっても、ともかくも実際の育児参加行動の頻度が高いからである。だから母親は父親の育児参加度の高いことを認めているわけである。しかしⅣ型の父親の実際の育児参加行動の頻度は高くない。だからⅠ型の父親よりもⅣ型の父親の方が自己満足的な育児参加だといえるだろう。Ⅳ型の母親が父親の育児参加を認めていないのは、そのためである。

そしてⅡ型、Ⅳ型の父親が、自身の育児参加態度を低く評価しているにも拘わらず、母親は自分の育児参加態度に満足しているだろうと思っているのは、母親の期待・要請に応える形で（母親とのコミュニケーション頻度は高い。表13）育児に参加していると思っているからである。逆に言えば、このタイプの父親は母親の期待・要請の範囲内においてしか育児に参加していない。だから父親は自身の育児参加態度を積極的に評価しないのである。しかし母親の期待・要請の範囲内においては育児に参加していると思っている。だから実際の育児参加度は高いと思っているのである（表6～10）。だが、それがⅡ型とⅣ型に分かれるのは、いずれのタイプの父親も実際の育児参加度が高いにも拘わらず（表6～10）、育児についての夫婦間のコミュニケーション頻度の違いによるのではあるまいか。表13によれば、Ⅱ型の父親、母親はコミュニケーションの頻度をともに高いと評価しているが、Ⅳ型の父親はコミュニケーション頻度が高いと評価しているにも拘わらず、母親はコミュニケーション頻度が低いとしている。Ⅳ型の夫婦間には齟齬が生じているわけである。だからⅣ型の父親は母親の期待・要請に応じて育児に参加していると思っているにも拘わらず、母親はそうは思っていない。だから母親は、父親の実際の育児参加度が高いにも拘わらず、それを認めていないわけである。

このように見てくれば、最も安定している夫婦関係のタイプはⅡ型だと言えるだろう。Ⅱ型の夫婦は、夫婦間のコミュニケーション頻度も高く、育児に対する満足度も高く、育児不安も低い。だが、それは父親の育児参加が未だ母親を主体とした育児の補助的・援助的な役割しか担っていないことを意味している。

5. 要約と結論

母親の育児不安と夫婦関係との関連を明らかにするために、これまでは、夫婦間のコミュニケーション頻度、父親の育児参加に対する母親の満足度を指標として夫婦関係の在り方を捉えてきたが、ここでは、父親の実際の育児参加の態度とその父親の育児参加の態度に対する母親の評価との関連から夫婦関係を捉え、夫婦関係の在り方と母親の育児不安との関連を明らかにしてきた。結果を箇条書き風に要約すれば、以下のようである。

(1) 同じ育児行為と言っても、父親の在宅時間に合わせられる育児行為もあれば、常時子どもと一緒にいなければできない育児行為があり、父親は在宅時間に合わせられる育児行為であれば育児に参加している。

父親の育児態度と母親の育児不安

(2) 父親の育児態度を高く評価している母親は父親と育児を分担しているとしているが、父親の育児態度を低く評価している母親は自身を育児の責任者としている。

(3) 父親の育児態度を高く評価している母親は父親とのコミュニケーション頻度は高いと見なしているが、父親の育児態度を低く評価している母親はコミュニケーション頻度は低いと見なしている。

(4) 母親は育児に専念すべきだとする父親は育児についての母親とのコミュニケーション頻度は低いとし、育児も大切だが母親も自分自身の生活をもつべきだとする父親は育児についての母親とのコミュニケーション頻度は高いとしている。

(5) 育児は母親がすべきだと父親は育児についての母親とのコミュニケーション頻度は低いとし、育児は夫婦の分担とする父親は母親とのコミュニケーション頻度は高いとしている。

(6) 夫婦間のコミュニケーション頻度の評価に齟齬があれば、母親の育児に対する肯定的感情が高くても、育児不安は高い。

(7) 父親の育児態度を高く評価している母親は育児に対する満足度が高いが、父親の育児態度を低く評価している母親は育児に満足していない。

(8) 夫婦間のコミュニケーション頻度が低いか、あるいはその評価に夫婦間で齟齬があれば、自身の育児態度を高く評価している父親であっても、母親は自分の育児態度に満足していないだろうと思っている。

(9) それは夫婦間のコミュニケーション頻度が低いために、父親は母親の期待・要請に応じる形で育児に参加していないからである。だからこうした場合の父親は自己満足的な育児参加に終わっている。

(10) 夫婦間のコミュニケーション頻度が高い場合、父親は母親の期待・要請に応える形で育児に参加している。だから母親の育児に対する満足度も高く、したがって育児不安は低く、また父親の育児参加度も高く育児に対する満足度も高い。

(11) しかしそのことは父親の育児参加が母親の期待・要請の範囲内においてしか行われていないことを意味する。言い換えれば、父親の育児参加は未だ母親を主体とした育児の補助的・援助的な役割しか担っていないのである。

以上のことから結論として以下の点を指摘することができる。

(1) 父親の育児参加の自己評価が高くても、そして母親がその父親の育児参加度を高く評価しているとしても、育児についての夫婦間のコミュニケーション頻度が低いか、またその評価に齟齬があれば、母親の育児不安は高い。

(2) 父親の育児参加の自己評価が低くても、育児についての夫婦間のコミュニケーション頻度が高いことで夫婦が一致していれば、父親の育児参加に対する母親の評価は高く、育児に対する満足度は高く、育児不安は低い。

したがって、先に提示したⅡ型のタイプの仮説的内容は次のように訂正されねばならない。父親の育児参加に対する自己評価が低いにも拘わらず、父親の育児参加に対する母親の評価が高いのは、父

親自身の現実の参加水準と自己期待水準との間の齟齬ではなく、また父親の育児参加に対する母親の期待水準が父親の自己期待水準よりも低い水準にあるからでもなく、さらに母親の評価の対象が父親の現実の参加態度ではなく父親の意識としての自己期待水準にあるのでもない。それは父親の育児参加が母親の期待・要請に沿った形で行われているからである。その母親の期待・要請の範囲内において父親が育児に参加しているからこそ父親の育児参加に対する自己評価が低くても母親の評価は高く、母親の満足度は高く、母親の育児不安は低いのである。だが、それは育児についての夫婦間のコミュニケーション頻度が高いことで夫婦が一致しているという前提が必要である。

したがって、これまでの研究によって見いだされた仮説、すなわち「父親とのコミュニケーションの頻度が高いほど母親の育児不安は低く、また父親の育児への参加度が高いほど、母親の満足度は高く、育児不安は低い」という関係は、「夫婦間のコミュニケーションの頻度が高いことで一致している場合は、父親の育児参加度の如何に拘わらず、母親の満足度は高く、育児不安は低い」と修正されねばならない。父親とのコミュニケーションの頻度が高いと母親が評価しても、父親が同じように評価していないならば、母親の育児不安は低くはないし、また父親の育児への参加度が高ても、夫婦間のコミュニケーション頻度が高いことで夫婦が一致していなければ、母親の満足度は高くはなく、育児不安も低くはない。

こういうわけで父親の育児態度は、母親の育児不安と明らかに関係しているという事実が示された。

(以上、中田周作)

【注】

- (1) 牧野は、母親の育児不安が夫婦関係と関連していることを一連の調査研究によって明らかにしている。牧野カツコ「育児における<不安>について」『家庭教育研究所紀要 (No.2)』(1981), 「乳幼児をもつ母親の生活と<育児不安>」『家庭教育研究所紀要 (No.3)』(1982), 「働く母親と育児不安」『家庭教育研究所紀要 (No.4)』(1983), 「乳幼児をもつ母親の育児不安—父親の生活および意識との関連—」『家庭教育研究所紀要 (No.6)』(1985), 牧野カツコ「乳幼児をもつ母親の学習活動への参加と育児不安」『家庭教育研究所紀要 (No.9)』(1987), 「<育児不安>の概念とその影響要因についての再検討」『家庭教育研究所紀要 (No.10)』(1988)。
- (2) しかし父親が未だ直接的に育児行為を分担していなくても、母親を介して、あるいは意識的に育児に関わっている限り、父親は、母親とは違った形での育児不安を抱えているのではないか。こうした視点からの父親の育児不安については、住田正樹・藤井美保「育児不安に関する研究—父親の場合—」(『九州大学大学院教育学研究紀要』創刊号(通巻 第44集). 1999. 79-98頁)を参照)。
- (3) 住田正樹「母親の育児不安と夫婦関係」日本子ども社会学会編『子ども社会研究』第5号(1999) 3頁。
- (4) 住田正樹・藤井美保 前掲「育児不安に関する研究—父親の場合—」および住田正樹 前掲

父親の育児態度と母親の育児不安

「母親の育児不安と夫婦関係」, また住田正樹, 藤井美保, 田中理絵による共同研究発表「母親の育児不安に関する研究」日本子ども社会学会大会第4回大会(平成9年6月6～8日, 於・東京学芸大学, 発表者: 田中理絵)の発表資料。

(5) 住田正樹 前掲「母親の育児不安と夫婦関係」

【付記】 本稿は, 日本教育社会学会第51回大会(平成11年10月1日～3日, 於・東京大学)における共同研究発表(住田正樹・藤井美保・田中理絵・中田周作「父親の育児態度と母親の育児不安」(発表者: 中田周作))をもとに執筆したものである。

A Study on Fathers' Child-Care-Attitude and Mothers' Child-Care-Anxiety

Masaki Sumida & Shusaku Nakada

The aim of this paper is to examine the relation between fathers' child-care attitude and mothers' child-care anxiety. It is generally said that the higher mothers' frequency of the communication with father, the lower mothers' child-care anxiety is and that the higher fathers' frequency of the participation in child-care, the higher mothers' satisfaction and the lower mothers' child-care anxiety are. Increasing participation of mothers in work out of home, fathers are expected to participate in the child-care, and actually they do. But only few researches have so far been made at the view of fathers' child-care attitude. Then we made an investigation on child-care anxiety into 570 pairs of kindergarten pupils' parents.

At this time, we classified fathers' child-care attitude into four types by using two standards. The first is fathers' self-evaluation for fathers' participation in child-care. The second is mothers' evaluation for fathers' participation in child-care. So, we classify the fathers' child-care attitude four types according to self-evaluation and other-evaluation.

Mothers' child-care anxiety is divided into four types. The first is general child-care anxiety. The second is child-care anxiety about their children's growth and development. The third is child-care anxiety about one's own ability of child-care. The fourth is child-care anxiety about frustration through their child-care.

These analyses lead to the results as follows:

- (1) The degree of mothers' child-care anxiety is high on condition that the frequency of the communication about the child-care between the couples is low or there is a difference in recognition of the frequency of the communication about the child-care between the couples, even if fathers' self-evaluation for fathers' participation in child-care is high, if mothers' evaluation for fathers' participation in child-care is high.
- (2) Mothers' evaluation for fathers' participation in child-care is high, mothers' satisfaction for child-care is high and mothers' child-care anxiety is low on condition that there is a same in recognition of the frequency of the communication about the child-care between the couples, even if fathers' self-evaluation for fathers' participation in child-care is low.

These results lead to the conclusion that mothers' satisfaction is high and mothers' child-care anxiety is low on condition that father and mother recognize that the frequency of the communication about the child-care between the couples is high, this has no relationship to fathers' participation in child-care.